

撃の最後の足場とし、東洋への野望をこゝに掘返し、ようとした米國にとつても、深刻な痛手だつたに違ひない。もとく米海軍は、緒戦勢頭のハワイ海戦によつて太平洋艦隊の主力を撃滅され、マニラのアジア艦隊また脆くも覆滅され、さらにジャヴァ海方面において残存勢力に殲滅的打撃を受け、英國と共に新たに派遣した艦艇をもつて珊瑚海に反撃を試み、わが制海権の伸張をこゝに喰止めようとして失敗し、辛うじて残されたいはゆる南方進軍路を維持して、濠洲への輸血路たらしめんとし、最近に至り少將シャフ

ヌを新たに東南太平洋米海軍司令官に任命し、濠洲防衛に躍起となつてゐたのであるが、この「南方進軍路」も、その根元において切斷されんとするに至つたのである。珊瑚海の敗戦後、敵海軍はシドニーを最後の退避地とし、こゝに類勢挽回

の足場を築き、一方、米濠連絡線を確保せんと努めたのであるが、敵に息もつかさぬわが電撃作戦は、敵の企圖を粉砕し、濠洲を孤立化せしめるに至つたのである。

「北方進軍路」の覆滅

マダガスカル強襲、シドニー急襲によつて、インド洋ならびに西南太平洋における敵海軍部隊の作戦線は、今度は遠く北に伸びて、六月四、五兩日のダックハーバーの空襲となり、七日以後続行中のアリューシャン列島諸要點の攻略となつた。

もとく米國は、戦前から東洋に對する三つの進軍路を想定し、シナトル對岸のビューゼットサウンド軍港を本據とし、アラスカのシトカからロジャク島を経て、アリューシャン列島のダックハーバー、キスカ、アッツを結ぶ線

から、わが國を窺はうとする、いはゆる北方進軍路を重視してゐたのであるが、シトカ、コジック、ウナラスカ島等には、一九四一年七月までの間に前後三回に亘り、合計三千三百万ドルの巨費を投じ、空軍および潜水艦基地として軍事施設を強化しつゝあつたことから、その意圖が判然とするのである。

ことに、緒戦によつて、ウエーキ、グアム、マニラの前進基地が攻略され、いはゆる中央進軍路は寸斷されてしまひ、「南方進軍路」もまた完全にその死命を制せられるに至つた現在、敵に残されたものは、その「北方進軍路」だけなのである。

もとより、既に濠洲進軍作戦を策す敵艦隊勢力は潰滅してゐるとはいへ、北方の諸基地を準備し、航空機または潜水艦によるわが本土襲撃といふ深い期待は残されてゐたわけであ

る。ところがこの期待さへも、わが海軍部隊のダックハーバー攻撃、並びに陸軍部隊との協同による諸要點の攻略によつて、一場の夢と化し去つてしまつた。

アリューシャン列島の諸要點を攻略したことは、夏季を迎へるに當つて敵の蠢動を先制したものであり、敵が勝算してゐた「北方進軍路」遮斷の態勢はこゝに確立されたわけである。

敵の「空母集團」殲滅

さらにわが海軍部隊は、六月五日、太平洋洋心の敵根據地ミッドウェーに對し猛烈な強襲を加へ、米航空母艦エントープライズ型(二万九千九百トン)、同ホーネット型(二万九千九百トン)各一隻を撃沈したほか敵飛行機約百二十機を撃墜、重要軍事施設に甚大な損害を與へた。

相次ぐ敗戦により米國の太平洋にお

ける海上勢力は、僅かに航空母艦三隻、多くみても四隻程度を中心とするものであり、海上決戦の勢力を喪失した米海軍は、専ら空母集團によるゲリラ戦を企圖してゐるのであるが、それも珊瑚海敗戦後は極めて望みの薄いのとなつてゐた所へ、今また虎の子の空母二隻を失つて、いよいよ最後に残されたゲリラ戦さへが、全く消滅するに至つたといへるのである。

本作戦において、わが方でも航空母艦一隻喪失、同一隻大破、巡洋艦一隻大破といふ損害のあつたことからしても、如何に激戦であつたかゞ想像されるのであるが、これは敵の最も痛みの前進基地を空襲、強打することにより、殘敵の敵航空母艦群を誘き出し、いはゆる刺し違へ戦法によつて敵を殲滅せんとする作戦であつたといふべく、「肉を斬らせて骨を斬る」わが奥深い獨特の兵術の神髓が發揮されたものとみる

べきであらう。すなはち、戦艦を初め各艦艇を大量に喪失した現在、敵の「骨」は實に僅かに残された三隻乃至四隻の航空母艦だけなのであるが、これを撃滅してしまへば、敵にとつて、相當期間海上權の再建は出来なくなる道理で、殊に多數の航空母艦を保有するわが方としては、その目的を達するためには、一艦一殺至難で刺し違へても差支へないものであつて、かゝる犠牲は雄渾なる作戦目的を達成するためには、まことにやむを得ないのである。

かくてわが海軍部隊は、西は遠く西インド洋を歴し、南は遙か米濠連絡線を抑へ、さらに北は敵の「北方進軍路」を完全に遮斷し、一方、敵空母集團を消滅させてゲリラ的蠢動の源を絶つなど、雄渾無双の新作戦の展開は、敵に無限の脅威を與へてゐるのである。